



係助詞「でも」と「だって」の用法について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 小野, 米一, 李, 志華 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00003521

係助詞「でも」と「だって」の用法について

小野米一・李志華

I はじめに

(1) 動機及び目的

私は国で中国人を対象に日本語現代文法を教えていた時、学生にこういう質問を受けたことがある。「先生だって、学生だって、みんなまじめだ」「4時までだって、5時までだって、あなたのいらっしゃる時までおまちしましょう」という二つの例文の「だって」は「でも」と言いかえられるかどうかというのである。この問題に答えるため、さっそく手元にある辞書と文法の本を調べてみたが、うまく説明してくれている本が見当らなかった。日本へ来てから、何人かの日本人学生に聞いてみたところ、「先生だって、学生だって、みんなまじめだ」の「だって」は「でも」と言いかえにくい、「4時までだって、5時までだって、あなたのいらっしゃる時までおまちしましょう」の「だって」は「でも」と言いかえられるという。

では、なぜ、一方は「でも」と言いかえられ、一方はできないのであろうか。「でも」と「だって」のそれぞれの意味・用法について分析し、その共通点・相異点を明らかにしたいと思う。

(2) 研究方法

係助詞「でも」「だって」の用法を明らかにするために、辞書・本¹⁾などから例文を求めた。これをアンケート表とし、女子学生11名²⁾に「○(使える)」、「×(使えない)」をつけてもらった。回答者がきわめて少数なので、集計結果を一覧表に示すことはしない。しかし、例文に関して直接に多くの説明も得られたので、この調査結果を参考にしながら、「でも」と「だって」の用法を比較検討し、気づいた点を述べてみたいと思う。

なお、用例の出典及びその略号については、本稿の末尾に一括して掲げた。

II 「でも」「だって」のいずれもが「使える」とされた文

II-1 ある特別と思われる場合を例示し、その他の場合は言うまでもないの意を表わす

①そんなことは子供 {でも/だって} 知っている。(大P.531)

②あの先生は親切で、夜中 {でも/だって} 往診してくださいました。(同上)

①と②は「でも」「だって」が体言に接続し、極端な場合を例示している。①は「そんなこと」は、ごく常識的なことであって、「子供」でさえ知っているから、まして大人は「もちろん知っている」という意味を表わす。②は往診という行為は普通、昼間でもあまり好まれないことであるが、しかし、この先生はとても親切で、「夜中」であっても、往診してくれたのである。

- ③子どもから {でも/だって} ばかにされている。
④そんなことは親に {でも/だって} 話せないよ。(大P.435)
③と④は「でも」「だって」が格助詞につく例である。「でも」「だって」を取り去っても、文自体は成立する。「でも」「だって」を使うことによって、「子どもから」あるいは「親に」を強調している。
- ⑤見るばかり {でも/だって} 許されぬ。(講P.227)
⑥途中まで {でも/だって} いいから、送って来てほしいな。(大P.435)
⑤と⑥は副助詞につく例である。「でも」「だって」はある特殊な場合を例示し、ほかの場合は、「もちろんである」という意を表わす。³⁾
⑦今すぐ {でも/だって} いいよ。(大P.435)
⑧少し {でも/だって} 油断したら、つけこまれてしまいますよ。(大P.531)
⑦と⑧は副詞につく例である。⑦は「いつでもいいが"今すぐ"でもよるしい」、⑧は「かりに"少し"であっても、油断は許されない」ことを表わす。

II-2 疑問詞を受け、全部を包括した形で事柄が成立することを示す⁴⁾

- ⑨だれ {でも/だって} 彼が好きになるよ。(教P.406)
⑩彼はいつ {でも/だって} 笑顔だ。(同上)
⑨と⑩は疑問詞について、「特別のものごとだけではなく、すべての」⁵⁾という意を表わす。「なに」「どこ」「いくら」などにもつく。

II-3 前にあることがらとあとのことがらの関係がふつうなら考えられないような関係にある場合⁶⁾、「それでもなおかつ」「たとえ～だとしても」の意を表わす⁷⁾

- ⑪雨天 {でも/だって} あすの旅行は行きます。(外P.674)
⑫金持ち {でも/だって} 幸福だとはかぎらない。(同上)

II-4 関連する物事の中からいくつかを例として示す

- ⑬4時まで {でも/だって} 5時まで {でも/だって} あなたのいらっしゃる時までおまちしましょう。(外P.578)
⑭僕は昼 {でも/だって} 夜 {でも/だって} かまわない。
⑬には二つの時間帯を列挙している。「4時までであろうと、5時までであろうと、あなたのいらっしゃるまでずっとまちますよ」という意を表わす。したがって、「6時まででも、7時まででも待っていますよ」というニュアンスがよみとれるが、「4時まで」あるいは「5時まで」がいちおうのめやすになる。⑭は文末の「かまわない」からもわかるとおり、「いつにしてもいい」と、相手の意志にまかせている。「でも」と「だって」は同じように使われているが、しいて両者の違いをいえば、⑬の「だって」は「4時まで」あるいは「5時まで」待つということが実際にはかなり困難であるがたとえそうだとしても意であり、「でも」は考えやすい時間を例としてかりに列挙してみたのである。同様に考えると、⑭の「でも」は「かまわない」に重点をおき、「だって」は「昼」「夜」を強調することになる。
- ⑮映画に {でも/だって} 芝居に {でも/だって} 君の好きなほうに連れていってあげるよ。(教P.406)
⑯大きい {でも/だって} 小さい {でも/だって} 味には変わりはないよ。(大P.435)

⑮は映画と芝居を、⑯は大きいのと小さいのを、例として示したものである。例として挙げたもの以外(⑮では「落語」「相撲」「サーカス」など、⑯では「中ぐらいの」「やや大きめの」「やや小さめの」など)であってもさしつかえないことが考えられるが、例として掲げたものがいちおう特徴的な事例、つまりいちおうの「めやす」とされよう。

⑰あの人なら英語 {でも/だって} フランス語 {でも/だって} できます。(外P.578)

⑱洪水 {でも/だって} 日照り {でも/だって} 我々の生活をおびやかすものではなくなった。このようにいくつかを例として列挙する場合、その「例」によってはある種の意味あい暗示されることがある。「国語-算数」は頭の良い子であって他の「社会」や「理科」もよくできる可能性があるし、「料理-裁縫」はよいお嫁さんの条件であって礼儀作法のわきまもある、といった具合である。⑲の「洪水-日照り」は天災の代名詞で他の天災についても同様のことが考えられるが、⑰の「英語-フランス語」では「英語」と「フランス語」については言えてもその他の言語についてまではどうだかわからない。

次の例には「何」「どこ」がついて、同類のものがすべて含まれることになる。

⑲われわれの造船所は客船 {でも/だって} 貨物船 {でも/だって} 何 {でも/だって} つくれる。

⑳新宿 {でも/だって} 原宿 {でも/だって} どこに {でも/だって} いい。

⑲は列挙された客船と貨物船のほかに、漁船でも軍艦でも、船でありさえすれば、特定の種類に限られないことを示す。⑳は列挙された「新宿」「原宿」のほかに銀座でも、秋葉原でも、「どこでも」いいのであって、特定の場所に限らないことを表わしている。

㉑アメリカへ {でも/だって} ヨーロッパへ {でも/だって} 行ける機会があるのに、どうして行かなかったのですか。(外P.578)

これはアメリカやヨーロッパのどちらへも行くチャンスにめぐまれたのに、何かの原因で行かなかった場合である。「でも」を使うと列挙したものほかに、まだどこかへ行ける可能性がある。つまり「外国へ行く」という行為を強調している。「だって」を使うと「アメリカ」あるいは「ヨーロッパ」という行く先を強調し、このすばらしい行く先に対してなんとなく残念がっているような気持ちがよみとれる。

㉒みみず {でも/だって} おけら {でも/だって} あめんぼ {でも/だって} みんな生きている。

この「だって」は極端なものをあげて、「このようなものでさえ生きているから、まして人間、動物は」という意を表わし、「でも」は「たくさんの同類の事柄を列挙している」のである。

以上、⑬～㉒を見てわかるように、これらは、いずれも物事を例示的にあげ、それらに特に限るわけではないが、例に掲げたものがいちおう特徴的な事例とされよう。

II-5 「でも」と「だって」を使った文のそれぞれの意味が異なるもの

㉓散歩に {でも/だって} 行きたいなあ。(教P.406)

この例文では一見「でも」と「だって」は同じように使われているが、「でも」は単に一つの例として挙げたのであって、「散歩に」でなくてもかまわない。「だって」はいろいろしたいことがある中で、特別な場合を例示して、せめて散歩ぐらいは行きたい、ということを表わす。次の㉔も同じように解釈できる。

㉔今世紀の人類科学の進歩はめざましく、とうとう月に {でも/だって} 行くことが可能となった。

㉓は軽い例、㉔は重い例を提示し、他の場合はもちろんであるの意を言外に表わす。

III 「だって」が使えて、「でも」が使えない文

III-1 疑問詞あるいは最小限の数量を表わす語につき、下の否定の語と呼応して全面否定を表わす

②⑤私は学生時代には1度 {だって} ちこくなんかしませんでした。(外P.579)

②⑥一円 {だって} 借りた覚えはない。(大P.435)

②⑤②⑥は最小限の数量を表わす語につき、下の否定語と呼応して、全面的な否定、つまり「全然～ない」という意味を表わす。

また、疑問詞について

②⑦だれに {だって} 未来のことは分からない。(教P.406)

②⑧彼はいつ {だって} うちにいない。(大P.435)

のように、下につく否定語と呼応して、事柄が成立しないことを表わす。⁹⁾

III-2 一对の語を挙げて、それらを代表とする他のすべての場合にも通じることを表わす⁹⁾

②⑨山 {だって} 川 {だって} 昔のままである。

③⑩電気代 {だって} ガス代 {だって} 水道代 {だって} みんな私の方で払ってやっているんです。(大P.435)

③⑪あなた {だって} わたし {だって} みんな迷惑をこうむったくちよ。(文P.201)

③⑫田中さん {だって} 山田さん {だって} もうみんな来ていますよ。(外P.578)

②⑨～③⑫の「だって」は同類の事柄を並べ示して、ほかのものはもちろん同じであることを表わしている。③⑪は迷惑をこうむるのは「あなた」と「わたし」だけでなく、ほかの人も迷惑をこうむる。ただ、例として、「あなた」と「わたし」を取り上げたのである。③⑫はたくさんの人が来ていたが、その中の「田中」と「山田」を取りたてて、例示したのである。「こうむったくちよ。」も「来ていますよ。」も話しことばであり、「だって」の「くだけた」調子と照応している。

③⑬太郎 {だって} 次郎 {だって} それに賛成だ。

③⑭君 {だって} 僕 {だって} 同じさ。(漢P.1294)

③⑮先生 {だって} 学生 {だって} みんなまじめだ。

この③⑬③⑭③⑮はいずれもそのどちらでも「同じ事情である」という意味を表わす場合の例文であるが、③⑬と③⑭は「だって」を使うことによって、それぞれ「だって」の前の言葉を強調している。たとえば、③⑬はそれに賛成した人は、ほかの人ではなく、「太郎」と「次郎」である。③⑭はほかの人はどうあろうがとにかく「君」と「僕」は同じである。③⑮の「先生だって、学生だって」はかなりくだけた言い方で、あまりいいイメージを与えない。普通、「でも」は使いにくい。もし、「先生であっても、学生であっても、みんなまじめである」というニュアンスなら、「でも」と言いかえられないこともないだろう。しかし、この場合の「でも」は「できえ」の意味とかなり近く、「まじめであるはずの先生が、普段、あまりに不まじめであり、学生は学生でまた不まじめである」という不自然な感じを与える。こういう点からいうと、普通、この③⑮の「だって」は「でも」と言いかえることができないと思う。

③⑯兄さん {だって} 姉さん {だって} 持っているのに。(中P.667)

③⑰洋服 {だって} くつ {だって} みんな兄貴のお古だ。

この③⑯と③⑰は子供が親にものをねだるときに言うもので、くだけたいい方である。「だって」を使っ

て、「だって」の前の言葉を強調している。⑩は兄さんと姉さんはみんな持っているのに、なぜ私に買ってくれないかというニュアンスがあり、⑪も洋服もくつもみんな兄さんの使い古しで、なぜ新しいのを買ってくれないかと不満・不平を持って、文句を強くいう例文である。文体も口語的である。

⑩張君 {だって} 李君 {だって} みな君の案には賛成だといっている。

⑪田 {だって} 畑 {だって} みんな抵当にはいっているそうだ。(文P.201)

⑩⑪の文末は伝聞の言い方で、「だって」によって前の語を強調している。

以上⑨～⑪までの例文を見てわかるように、これらの例文は構文上の特徴として、⑨⑩⑪⑫を除いて、いずれも「みんな」という単語が使われ、⑨⑩⑪⑫は「みんな」という単語がついていないが、文意からやはり「みんな」という意味がよみとれる。この⑨～⑪までの例文はすべて「Aであろうと、Bであろうとみんな△△△である」という意味を表わしているのである。

IV 「でも」が使えて、「だって」が使えない文

IV-1 他により適当なものがあるかも知れぬが、という気持を言外に含めて、ある事柄を例示的に提出する、幾分、投げやりなニュアンスをもつことがある。¹⁰⁾

必ずしもそれと限るわけではないが、一つの例としてかりに～するならばの意を表わす

⑩まだ時間があるのでお茶 {でも} のんで行きましょう。(外P.674)

⑪雑誌 {でも} 読んで待っていて下さい。

⑩⑪の「でも」は体言について、必ずしも例としてあげられた「お茶」「雑誌」に限られているわけではない。⑩はコーヒーでもいいし、紅茶でもいい、どうせ時間があるから、「少しひまつぶしをしましょう」という意を表わし、⑪も必ずしも「雑誌」に限るのではなく、待っていてくれれば「何をしていてもいい」のである。

⑫ポチと {でも} 名をつけようか。(岩P.694)

⑬日曜に {でも} いらっしゃい。(漢P.1472)

⑫⑬は、「でも」がなければ、動作主の目的、あるいは話者の意図ははっきりとしているのに対して、「でも」を使うと、必ずしも「それだけにこだわらない」「一例としていえば」¹¹⁾という気持が付けそえられる。

⑭バスに乗って {でも} 行けばいいじゃないか。

⑮こんな時間に遊んで {でも} いろいろものなら叱られちゃうよ。(大P.531)

⑭⑮は接続助詞「て」につく例で、やはり「一例としていえば」という気持を表わし、言葉をやわらげるために使う婉曲的な表現である。

⑯壊し {でも} したら大変だ。(教P.406)

⑰忘れ {でも} しょうものなら、それこそ大変です。(大P.531)

以上、動詞の連用形につく例文である。

⑱もう少し涼しく {でも} になったら、お遊びにおいでください。(同上)

⑲心安く {でも} になったら、話すかもしれぬ。(講P.227)

以上、形容詞の連用形につく例文である。

⑳もっと便利に {でも} になったら、気軽に来られるでしょう。(大P.531)

㉑静かに {でも} してくれればよいに。(講P.227)

以上、形容動詞の連用形につく例文である。

④⑥～④⑩の例文はいずれも活用語の連用形について、「～でも～たら」、「～でも～なら」、「～でも～ば」の形で、「必ずしもそれと限るわけではないが、一つの例としてかりに～とするならば」ということを表わしている。

ただし、④⑩はお菓子などたくさんいただいたあとで、「まだ時間がある。せめてお茶だけでも」という意であれば、「だって」も使えよう。④⑨は、平日訪れた人に、日曜日にも来たってかまいませんよという気持ちで「だって」を使うことができる。このような用法についてはII-5で指摘した。

IV-2 一対の語を挙げ、その中のどれかあるいは列挙された物事とおなじ種類の中のどれかを選択する

⑤②ご飯 {でも} お粥 {でも} 早い方を頼む。

⑤③うそ {でも} ほんとう {でも} とにかく試してみることだ。

⑤②はご飯の方が早ければご飯を頼んでもいいし、お粥の方が早ければお粥を頼んでもいいのである。⑤③の「試してみることだ」も話し手の意志を表わしている。

⑤④パン {でも} 御飯 {でも} 結構です。(日P.395)

⑤⑤コーヒーをください。アイス {でも} ホット {でも} どちらでもいいです。

⑤④⑤⑤は「結構です」「どちらでもいい」という表現が文中にある。特に⑤⑤は「コーヒーをください」という「依頼表現」があるため、「だって」は使われなくなったのである。

⑤⑥鉛筆 {でも} 万年筆 {でも} ちょっとかしておくれ。

⑤⑦りんご {でも} みかん {でも} 好きな方を食べなさい。(新P.721)

⑤⑧新聞 {でも} 雑誌 {でも} 読んで下さい。

これらの文末は、すべて依頼または勧誘表現である。⑤⑥の「かしておくれ」は鉛筆と万年筆だけでなく、書くものなら、何でもいから、一つかしてくださいという意味である。⑤⑦の「食べなさい」は、聞き手の好みによって、どれを選ぶか相手にまかせる表現である。⑤⑧の「読んでください」も「新聞」「雑誌」だけでなく、ほかのよみものでもいから、何かをよんでくださいの意味である。このような、「特に限らない、ほかの同類を暗示している」表現が文中に出てくる場合、「だって」は使いにくいと思う。

この⑤②～⑤⑧までの例文を見てわかるように、これらの文の中には、いずれも一対の「でも」が出ているが、しかし、この場合の「でも」の表わす意味は累加、あるいは共存の並列ではなく、「例示、あるいは選択の対象を並べてとりたて」¹²⁾、その列挙された物事の中(あるいはその同類の中)から「一つ選ぶ」という意味あいがふくまれている。また、こういう場合の「でも」のついた語はほとんど同意語、あるいは反意語であって、対等的な文節であり、「Aであろうと、Bであろうとその中のどちらかである」あるいは「その同類の中のどれかを選ぶ」という意味を表わす。

ただし、⑤④は文末の「結構です」を「いいよ」「かまわないよ」などとすると、くだけた表現となり、「だって」も使える。また、⑤②⑤③⑤⑤⑤⑥⑤⑦⑤⑧も、「△△でも△△でも」のあとに「いい」等の表現があれば、「だって」はつかえる。

V 「でも」「だって」と「も」との関連

「でも」と「だって」の使い方を比較検討しているうちに、この二つは係助詞「も」とかかわっ

ている部分があるということに気がついた。ここで、この三つの助詞の関連に少しふれてみたい。
前に掲げた例文の「でも」「だって」を「も」にかえると次のようになる。

V-1 IIの各文例を「も」にかえた場合

II-1からII-5までの24の例文を「も」でおきかえてみた。すると、II-1・2・4・5では使えることがわかった。たとえば

II-1 ①'そんなことは子供 {も} 知っている。

II-2 ⑩'彼はいつ {も} 笑顔だ。

II-4 ⑬'4時まで {も} 5時まで {も} あなたのいらっしゃる時までおまちしましょう。

II-5 ⑳'散歩に {も} 行きたいなあ。

のようにおきかえられる。もちろん「も」を使うことによって、ニュアンスのちがいは生じる。①'の「でも」と「だって」は「極端な場合を例示し、他の場合はもちろん」の意を表わしているのに対して、「も」は添加の意味である。

それでは、II-3はどうであろう。

II-3の⑪'雨天 {も} あすの旅行は行きます。

II-3の⑫'金持ち {も} 幸福だとはかぎらない。

となり、「も」でおきかえることはできない。これは、「でも」「だって」が条件を例示する用法をもっているのに対して、「も」にはこういう用法がないからである。

V-2 IIIの各文例に「も」を入れた場合

III-1からIII-2までの15の例文を「も」でおきかえてみたところ、すべて可能であった。III-1の㉔は「私は学生時代には1度 {も} ちこくなんかしませんでした。」となり、「も」は全面的な否定を表わす。また、III-2の㉑'「山 {も} 川 {も} 昔のままである。」の場合は、「も」は例示的に語句をとりたてて、他のすべてのものはもちろん同じであることを表わしている。ところで、

○雨ばかりでなく、風 {だって/も} 吹きだした。

○ノートだけでなく、テキスト {だって/も} 忘れて来た。

のように、「だって」と「も」はともに「添加」の意味を表わしているが、「だって」の場合はやや「不満」の気持がよみとれる。

V-3 IVの各文例に「も」を入れた場合

IVの各文例の「でも」を「も」でおきかえることはできない。たとえば

IV-1の④④'バスに乗って {も} 行けばいいじゃないか。

IV-2の⑤⑤'ご飯 {も} お粥 {も} 早い方を頼む。

しかし、④④と⑤⑤は先のIV-1でふれたように、ある条件のもとでは「だって」同様、「も」も使える。また、IV-2の⑤⑤⑤⑤⑤⑤のように、「早い方」「どちらでも」「好きな方」といった「選択」の語がつくと、「も」は使えなくなる。

VI まとめ

以上「でも」と「だって」の用法を明らかにするために、「も」との関連も参考にしながら、①～⑤⑤

の例文を通じて、私なりの分析と考察を行った。その結果はおおよそ次のように整理できると思う。

「でも」と「だって」は現代語では、だいたい同意に用いられるが、使われる場合によっては、互いに言い換えることができたり、できなくなったりする。つまり、

- 1 特別と思われる事柄を例示する場合や疑問詞について全面的な肯定を表わす場合、また、一對の語句をとりたてて、その関連する物事の中からいくつかを例として並べ提示し、文の表わす意味が「Aであろうと、Bであろうとどちらでもいい」「どちらでもいい、特に限らない」「例として掲げたものがいちおう特徴的な事例として、ほかの同類を暗示する」といった場合は「でも」と「だって」は互いにおきかえることができる。多少ニュアンスの違いが生じることもある。

「だって」はあまり容易ではないものを列挙して「たとえ～であっても」の意を表わし、「でも」はいくつかの例をひかえめに例示して「かりに～であっても」の意を表わす。

これらのいずれの場合も「でも」「だって」は「も」とのおきかえが可能である。ただし、「も」は「添加」の意味である。

- 2 前後が逆接の関係にある二つの文をつなぐ場合には、「でも」と「だって」は互いにおきかえることができるが、「も」とのおきかえは難しい。

- 3 最小限を表わす語について、全面的な否定を表わす場合や疑問詞について下につく否定語と呼応して事柄が成立しないことを表わす場合は「だって」と「も」が使われ、「でも」は使われない。また、文中に一對の「だって」があり、「幾つかの事象の代表として例示し、他もそれと同様」つまり「Aであろうと、Bであろうと、みんな△△△である」という意味を表わす場合は「だって」が使われ、「でも」とのおきかえは不可能である。この場合の「だって」はすべて「も」でおきかえられるが両者のニュアンスはちがう。

- 4 例えぼとしての例示の場合や接続助詞「て」、あるいは活用語の連用形につく場合は「でも」が使われ、「だって」は使われない。また、文中に一對の「でも」があり、物事を列挙し、その中のどれか（あるいは同類の中のどれか）を選ぶ意を表わし、しかも文末には「依頼と勧誘表現」などがある場合、「でも」だけ使われる。こういう場合の「でも」はほとんど「も」とのおきかえも不可能である。これは「も」に「もし仮に～たら」の意もなく、選択の意もないからである。

また、例文を考察しているうち、「でも」はやや丁寧な語感を与え、「だって」はやや乱暴な語感を与えることに気づいた。「でも」はやや正式的ではあるが、いずれも話しことば的であるため、固い文章や改まった談話にはあまり用いられないこともわかった。

以上の分析とまとめを通じて、文頭にあげられた「先生だって、学生だってみんなまじめだ」と「4時までだって、5時までだってあなたのいらっしやる時までおまちしましょう」という二つの例文をみると、なぜ前の文の「だって」は「でも」で言い換えることができず、後の文の「だって」は「でも」で言い換えられるか、という質問にも答えることができた。

拙稿は、少人数の日本人女子学生にアンケートをして得られた結果を参考に、自分なりの分析と考察を試みたものであって、不十分な点や矛盾したところがあると思われる。未熟な考察ではある

が、日ごろ悩んでいる問題点の一つについて、とりあえず報告をしてみた次第である。大方のご批評をお願いしたい。

註

- 1) 本稿中の例文は『日本文法大辞典』『日本語教育事典』『外国人のための基本語用例辞典(第二版)』などの辞書から拾ったものが多く、実際の言語生活ではあまり使われない文、あるいはもっと簡潔に言える文があるかもしれない。
- 2) 北海道教育大学旭川分校の女子寮に在住する女子学生。ほとんど全員が北海道内生まれの二十歳前後の若者なので、現代日本語について考察するうえで、地方差、年齢差、性別差などに配慮する必要があると思う。
- 3) 係助詞の「でも」と「だって」は、いちおう両方とも副助詞につく例をあげてみたが、必ずしもすべての副助詞につくわけではない。たとえば
○これだけ {○でも/×だって} とって置こう。(講P.227)
○これだけ {○でも/×だって} やってほしい。(大P.531)
という二つの例文を見てわかるように、この場合は「だって」はあまり使われないような気がする。また、
○ぼくなんか {でも/だって} それぐらいはできますよ。(大P.531)
○私など {でも/だって} それぐらいは出来る。(講P.227)
は、「でも」の例文としてあげられている。「ぼくなんかでも」「ぼくなんかだって」はともかく、「私などでも」「私などだって」は普段の言語生活ではあまり使われていないのではあるまいか。
- 4) 『日本語教育事典』 P.406による。
- 5) 『外国人のための基本語用例辞典(第二版)』 P.673による。
- 6) 同上 P.673による。
- 7) 橋本進吉によると、「でも」は「であって」の意の「で」に「も」のついたもの、「だって」は「だとして」から出たものである(『助詞・助動詞の研究』 P.198)。この二つの助詞にはともに「指定プラス逆接」の意味が含まれている。
- 8) こういう場合に「でも」を使うことができるのではないかという疑問を持つ人がいるかもしれないが、それは個人差による問題だと考えている。少なくとも、若者の間では、普段の言語生活の中で、「誰にでも未来の事はわからない」あるいは「彼はいつでも家にはいない」という表現をあまりしないようである。「誰にも未来の事はわからない」「誰も未来の事はわからない」とか「彼はいつでも家にはいない」とかいう。肯定文の「誰でも未来の事はわかる」「彼はいつでも家にはいる」の場合には「でも」がよく使われる。
- 9) 『現代語の助詞・助動詞』 P.68による。
- 10) 同上 P.99による。
- 11) 『日本文法大辞典』 P.531による。
- 12) 『岩波講座 日本語7 文法II』 P.394による。

用例の出典一覧

本稿で使った資料及びその略称は次の通りである。特に断りのないものは普段の読書メモから取ったもの（出典失念）と作例である。

- 1 (教)：『日本語教育事典』
- 2 (大)：『日本文法大辞典』
- 3 (外)：『外国人のための基本語用例辞典（第二版）』
- 4 (漢)：大連外国語学院編『新日漢辞典』遼寧人民出版社,1979年
- 5 (文)：江湖山恒明・松村明編『（日本文法講座6）日本文法辞典』明治書院,1958年
- 6 (講)：『日本文法講義』
- 7 (岩)：西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編『岩波国語辞典第二版』岩波書店,1971年
- 8 (日)：『岩波講座 日本語7 文法II』
- 9 (新)：金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎編『新選国語辞典新版』小学館,1974年
- 10 (中)：倉石武四郎・折敷瀬興編『岩波日中辞典』岩波書店,1983年

参考文献

- 松村明編（1971）『日本文法大辞典』明治書院
日本語教育学会編（1983）『日本語教育事典』大修館書店
文化庁編（1975）『外国人のための基本語用例辞典（第二版）』大蔵省印刷局
橋本進吉著（1969）『助詞・助動詞の研究』岩波書店
山田孝雄著（1954）『日本文法講義』宝文館出版
此島正年著（1966）『国語助詞の研究——助詞史の素描』桜楓社
大野晋・柴田武編（1977）『岩波講座 日本語7 文法II』岩波書店
国立国語研究所著（1951）『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』秀英出版

付 記

本稿はもっぱら李志華が執筆したもので、小野の意見によって書き改めた部分がある。

（小野：本学教授 旭川分校，李：本学旭川分校研究生・中国遼寧師範大学講師）